

一ニ三四五六七八九十百千萬

2. アアガ
実体

アマテラスオホミカミ
天照大御神

1. アアヒ
焼地

アマテラスオホミカミ
天照皇大御神

3. アアヒガニミ
作用力

アマテラシマシマスオホミカミ
天照坐皇大御神

4. シユウアイコウ
人間世界
このつなかり

オホトヒワケノカミ
大戸別神

オホヒビルメムチノミコト
大日靈貴尊

は亡くなってしまふ。

今仮に、○と書いて国を示すものとする。その中央に一点を描く。それを国の中心とする。○中心が有り外郭
 が有つてはじめて体を成し用を現ずる。ところが、「民主」といふ詞は○^{外郭}だけを認めて、未○^{中心}を知らない。是レ
 ではまだ国家組織が成り立つて居ないので、古典に所云「クラゲナスタダヨヘルモノ」である。ところで、然う
 云ふと、「マフツノカガミ」との判別に迷はれるかも知れぬ。

此の両者を共に○と書くことは出来るが、「マフツノカガミ」は天照大御神の和魂だから正確には、
 と書いた○であり、「クラゲナスタダヨヘルモノ」とは・も——も無い○である。近頃日本で騒ぐ民主の語は、
 此の空零の○だけを見て居るのだから大海に浮べる雪にも似て危いこと甚しい。

どうも是レに・を与へ——を知らしめて「天照大御神・天照皇大御神・天照坐皇大御神・大日靈貴尊・大戸
 日別神」即、「アアヒガテンジンユウアイコウ」と拝ませたい。

此のために我が「未来誌」は生誕したのである。

以上 昭和廿七年九月九日 未明三時筆録

多田先生が神象として書く「○」には二通りの意味がある。

一つには單なる資料「中心を持たない外郭」の意味であり。(クラゲナスタダヨヘルモノ)

もう一つには神界の「零の海」全体(大宇宙そのもの)の意味である。(マフツノカガミ)

これをノリトでは「アマテラスオホミカミ・アマテラスオホミカミ・アマテラシママメオホミカミ
 オホヒルメムケノミコト・オホトヒフアノカミ」と称する。

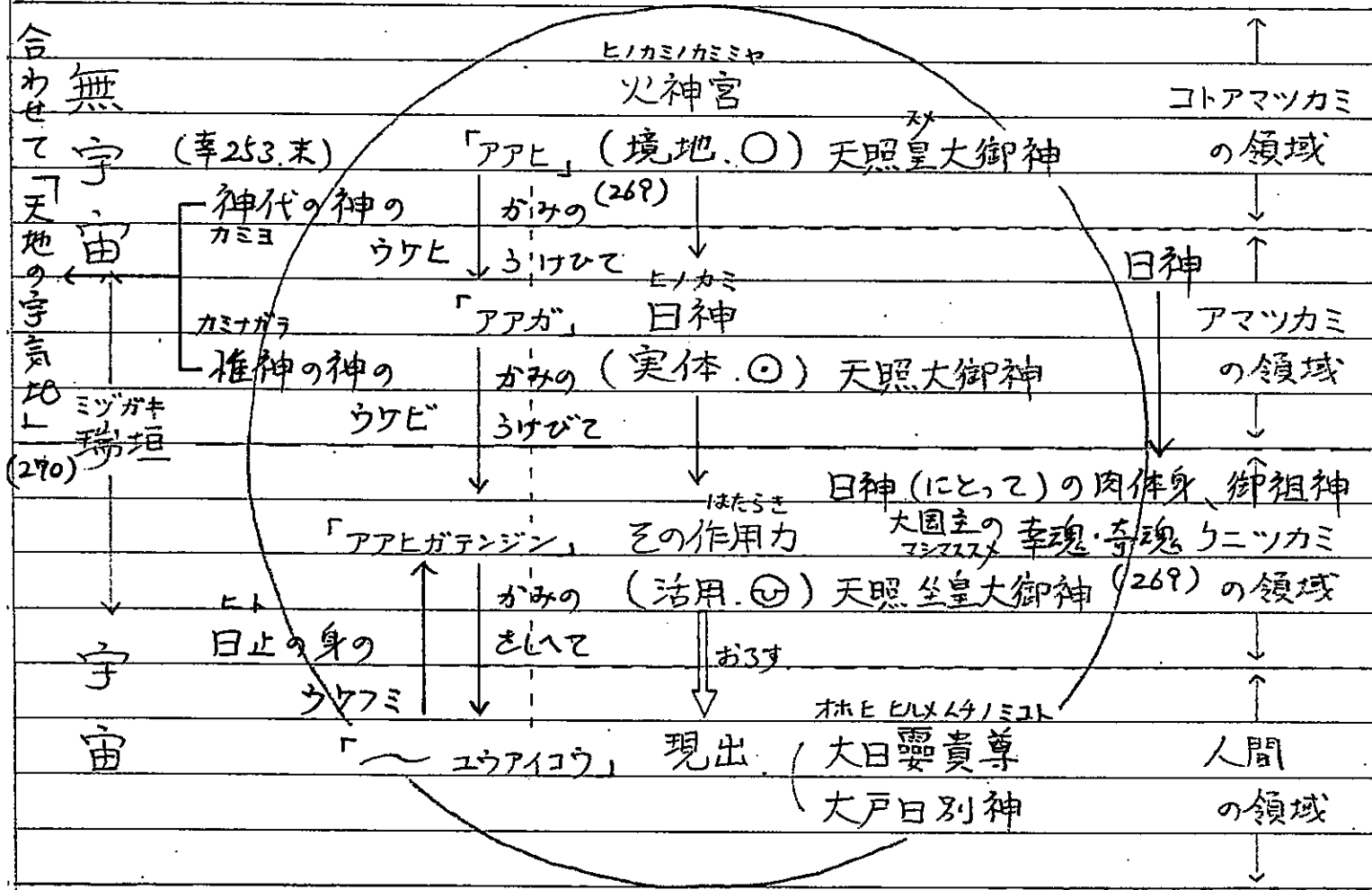
2019.12.17.

NO.

DATE

十四字秘言と大宇宙概念図

(あくまでも「理解の便宜」としての概念図である。実際には、
日神の作用力は、最初から宇宙の隅々にまで行き渡っている。)



古事記の記載は、一見まことに複雑ではあるが、

第一章は、別天神の神界記であるから、之を數理觀から言へば、最初に一を教へ、その一は、三から成り立つて居り、その三は、經と緯との二であるからとて、時間と空間とを現し來る本體としての零を知らしめたのである。

第二章は、宇宙成壞の垂示であるから、時間と空間との二つが一つになつては十で、その十が別れては、破壊と呼ぶところの死で、その死も結び來れば、建設と呼ぶところの生で、成で、此のやうな變化は、二、三、四、五、六、七、八、九と稱するので、その成り餘れる三、五、七、九の四と、成り合はざる、二、四、六、八の四との合ひては、八である。此の八に依つて、宇宙の萬有は制御せられ整理せられて平衡を保つことが出来るのである。

第三章は、高天原築成の祕儀である。之をミソギと呼んで、三十神界の生滅起伏である。

第四章は、罪惡觀で、數の分散である。

第五章は、高天原開闢記で、三十六の聚散離合である。

第六章は、罪惡觀の第二で、復活の垂示である。五の百倍と、百の百倍と、千の千倍との九である。と云ふと、ひどく普通學には遠ざかるが、神界の事理が複雑なのであるから、祖神垂示の數理觀は懇切丁寧であつても、之を理解することは、まことに容易ではない。で、以下之を省略することとしよう。

第七章は、中心觀で、箇體成立の原理に立脚して、國家觀を教へ、特に日本建國の精神を明にされたのである。

第八章は、綿津見宮と日少宮、産土神と鎮守神との關係を説示したのであり、

第九章は、死生解脫の祕を教へ、

第十章は、宇斗の神言靈を垂示されたのである。此の神言靈は、一言の萬城主の主るところで、古事記は之を下つ卷に記されたが、事實は勿論神代紀である。

神の代の、神の祕事。人の身の伏し仰ぎつつ。今日もかも、國平けく。明日もかも、うら安くこそ。内外隔てず。

靜寧和平の神國樂園を築くには、唯是、爾が身を爾自、倭の青垣東の山の上に齋き祭ればよいのである。

産土神の神徳は、^{ミ、タラキ}そのまゝ「ハハ」と成り鎮守神の神徳は、そのまゝ「チチ」となる。合せては「ミオヤ」と呼ぶ。爾が身は、固より「チチ」と「ハハ」との一つ身なれば、「ミオヤ」である。

ちち、はは、みおや、みおや。なべてのひとびと。わが、さきのよの、ちち、はは、みおや、みおや、われに、ゆかりある、なべての、みみたま。みな、ともに、さとり、さとる。さとり、さとれば、あまねく、ひとつなり。ああひがてんじんゆうあいこう。と、たたへまつるなり。

日本の古典は、之を傳へて、

天照大御神・天照皇大御神・天照坐皇大御神・大日靈貴尊・大戸日別神。

と、拜みまつるのである。固より、神代の神にてましますと共に、百八百萬魂神と御顯れ給ひつゝまします天津神・國津神なりと拜みまつるのである。

天津神輪、國津神輪の神挂り。かゝりて今ぞ、伎美が生れます。

別れては遇ひ、遇ひてはまた別れ、破れては出來、出來てはまた破れ、生れては死に、死にてはまた生れると、人の身は驚き騒ぐ。

伊邪那美命・建速須佐之男命・十七世神を経て造り成された出雲八重垣妣の國は、伊邪那岐大御神・天照大御神・天忍穗耳命・天津彦彦火瓊瓊杵尊の神の日を仰ぎて、こゝに復び、地天泰平の歡聲を揚げたのである。

かみのひの、ひかるをみれば、あめつちは、こをろこをろに、むすびむすべる。

天成地定。ああ是れ、神のみ恵なり。また是れ。神の神わざなり、實に是れ。神のみ心なり、み祖の神の神挂りなり。

神魔出沒蓋如此、神國現成又是如是。生死遷轉連環無際。今日畫得矣。無經無緯唯一球體。

ある。

その伝へは幸にして古事記や日本書紀などに委しいから、人人は須らく熟読究明すべきである。

第七章 終

第八章 少彦の協力^{マガツビノカミ}

「一にして二にして三にして四にして五にして六にして七にして八にして九なれば十と呼ぶ」とは「宇宙は統一躰なり」との義で、数を以つてそれを説明したのである。それだから、之れを数理観で宇宙観で、また、人身観だと云ふのである。

此の数の活用が神界をも、魔界をも現出するので、「鎮魂祭の糸結び」が行はれる。

魂の緒を結び結びて人は皆神とこそ成れ。日月隔てず。

日に夜にも結び留めたる君が魂。八代九重に仰ぎこそすれ。

高魂^{タカミムスビ}の神の御子に暴悪^{ミコ}で何うにも教へやうの無い神が在られた。大穴牟遲神はそれを良く養ひ育てたために出雲国を完成して大国主神と成られた。

暴悪なものを制御しようとすれば、それにも増した暴悪な力を持たねばならぬ。その暴悪な力を翻して神業に随順する。

それは、「神と成りたる魔」であることを屢々繰返して述べたが、そのやうな神魔の協力に依つて人天万類を

毒害和平ならしむることは、所謂「毒を以つて毒を制する」のではなく、「毒を変じて薬と為す」ものである。それならば、どうして「毒が薬に変わる」だらうか。

それには、二つの道がある。その一つは、毒を毒のまま分量と時間と空間とに適應させる。然うすれば、毒も薬の役を為る。是れは所謂政治家と呼ばれるものの慣用手段である。他の一つは、それとまるで趣を別にしてゐる。

それは、神音と神象と神数との活用によつて醜を美に悪を善に邪を正に轉換させるので、用ゐ方とか使ひ場所とか使用の時とかに關はるのではない。「神音を称^{タタ}へ神象を画^エき神数を算^スむ」。すると、禍津^{マガツビ}昆と呼ぶところの醜惡邪曲が極底最下の火と化して根堅^{ネノカタスクニ}洲国を築成する。

そのさまを「大祓の祝詞」が僅ながらも伝へてある。その中の文章の一部と行事中に称へる秘詞とは神音であり、行事中に画^{カク}するは神象であり、齋部の算^スむは神数である。さうしてその全部が行はれれば、瀬織津比咩・速開都比咩・氣吹戸主・速佐須良比咩の神座^{カミクラ}が成立する。それは則、日若宮^{ヒノワカミヤ}で、日隅宮^{ヒスミノミヤ}で、○^{ヒカリ}である。

かしこしや。此れ是の極底最下の一線は、即是れ極大無限の一線。線にあらず面にあらず点にあらずるの点線面なればとて之を画いて「ヒ」となし之れを算^スんで「イ」となし之れを詠^{ウタ}ふて「ム」となす。

神界構成妖魔群。昨是今非術魂城。出沒浮沈三惡道。願望一夕冢間煙。

立ちのぼる煙の糸の結び来て立ち舞ふ姿神ながらかも。

天地の神の心を畏みて人の世何時も浦安くこそ。

と教へられた。

日本古典に「御身之禊」^{オホミミノハラヘ}として伊邪那岐大御神が神と成り神の国を完成すべき方図を伝へて居ることは屢々挙げたのであるが、それに由ると、「一切を捨て」て初めて神界が築かれ、天照大御神・月読命・建速須佐之男命の三貴子を得させられた。「得させられた」とか「御生誕になられた」とか云ふのは、神話の形式だからなので、事實は「御身之禊」に由つて神身を築き得たので、その神身を説明するに器^{モノ}を借りて「鏡・璽・劔」と称へ、天皇としての御活用^{ミハタラク}を教へられたのである。之有るが故に、天皇は神にてまします。此の三種の神宝は常時不斷に玉躰を護り玉躰はまた常時不斷に此の神宝の妙徳を發揮し給ふ。此の故に、天皇は神にてまします。

第三章 完

以上 昭和廿三年十一月三日

第四章 山下の泉声

天皇は神にてまします。

明治天皇御製歌

まきばしら、たちさかゆるも、うごきなき、い^家へのあるじの、あ^主ればなりけり。

「家の主」とは「中心」である。小宇宙の中心であり、大宇宙の中心であり、大小を一貫したる大中心でもあ

図表：マハシラにおける三貴子

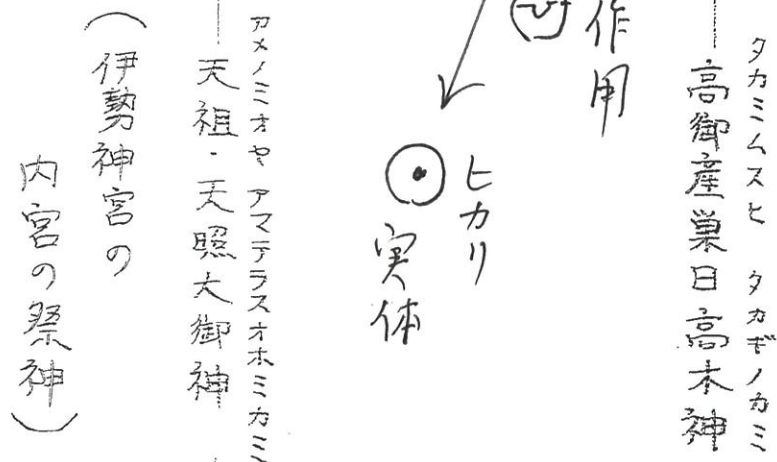
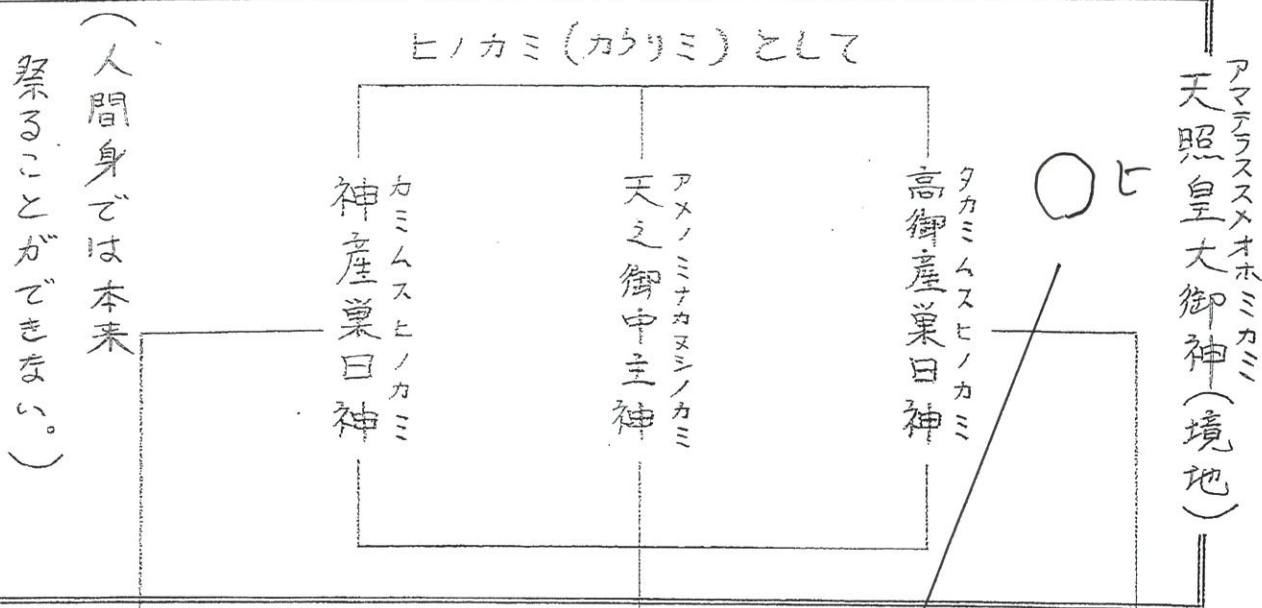
天々の神 カクリミ

天々の神 ウツシオミ

コトアマツカミとしての神名

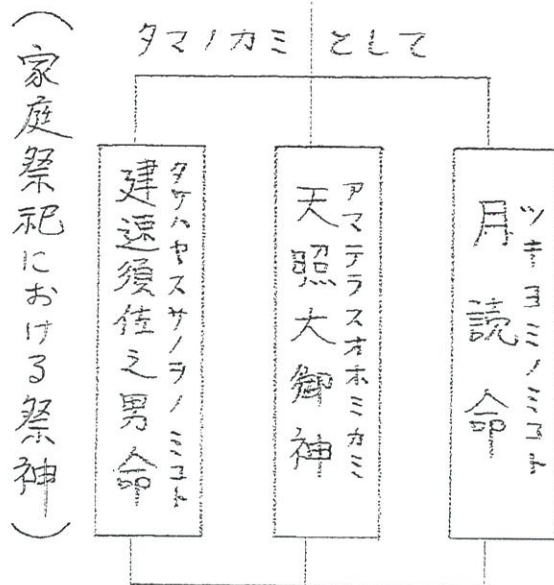
アマツカミとしての神名

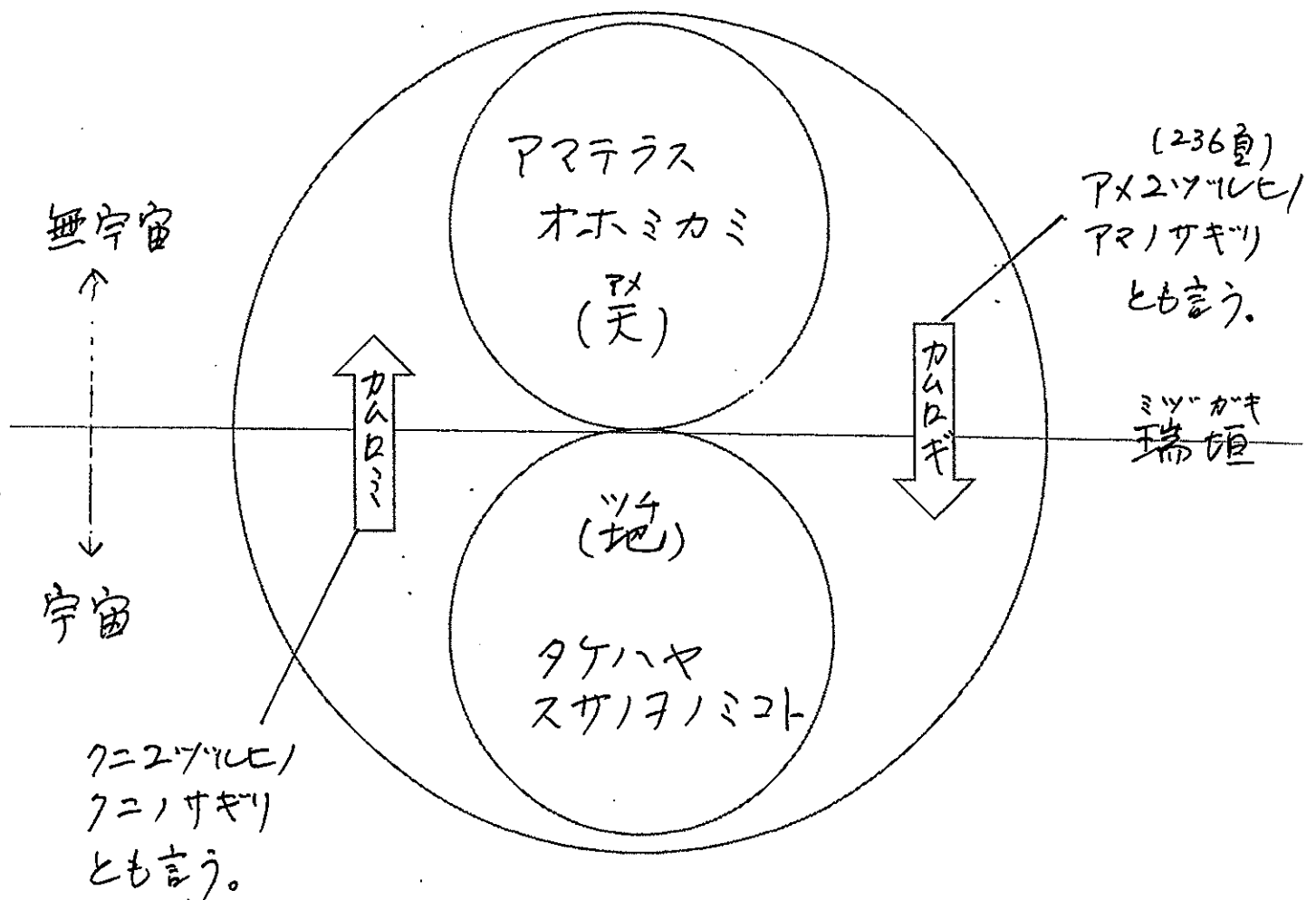
クニツカミとしての神名



カミムスヒ ミオヤノミコト
神産巢日御祖命

ミツガキ垣
(瑞垣)





全部アマツカミ (ウツシオミ) のヒノカミ

アマテラスの吹きはなつ イブキノサギリ

→アメユヅルヒノ アマノサギリ

スサノヲの吹きはなつ イブキノサギリ

→クニユヅルヒノ クニノサギリ

⇒合せて天祖の神名となす

天祖天譲日天狭霧国譲禅日国狭霧尊

アメノミオヤアメユヅルヒノアマノサギリクニユヅルヒノクニノサギリノミコト

コトアマツカミ 零の神 (カサミ)

アマツカミ " (ウツシオミ)

ウニツカミ 魂の神 以下、すべて、

↓ ミツガキ
瑞垣以下は、時間・空間という枠組みの中。

三貴子を始めとする、多くのアマツカミは、

しばしば、そのままに時空の内部に降りて来て、

ウニツカミとして働く。

人間の身では、アマツカミをそのままに拝みまわすことは
とても困難なので、

マヒシラにおいても、魂の神^{ラロガ}として表れた三貴子を祭る。

神道月詠の巻 知識

〔阿知女作法〕「あちめのわざ」とも読む。宮中鎮魂祭において用いられる鎮魂歌で、以下のよう
な文句からなる。

あちめ 一度 おおおお 三度 天地にき揺らかすは さゆらかす 神わがも 神こそはきねきこ

う (二本、きねきゆう) き揺らならば (二本、きゆらかす)。

あちめ 一度 おおおお 三度 石の上 布留の社の 太刀もがと 願ふその子に その奉る。

あちめ 一度 おおおお 三度 狛犬らが 持た木の真弓 奥山に 御狩すらしも 弓の弭見ゆ。

あちめ 一度 おおおお 三度 上ります 豊日雲が 御魂欲す 本は金矛 末は木矛。

あちめ 一度 おおおお 三度 三輪山に あり立てるちかさを 今榮えでは 何時か榮えむ。

あちめ 一度 おおおお 三度 吾妹子が穴師の山の 山のもと (二本、山人と) 人も見る歟に 深山 縋

せよ。

あちめ 一度 おおおお 三度 魂宮に 木綿取りしでて たまちとらせよ 御魂上り魂上りまし

し神は 今ぞ来ませる。

あちめ 一度 おおおお 三度 御魂みに (二本御魂上り) いましし神は (二本、いにましし神は) 今ぞ来ませる。

魂宮持ちて 去りくるし (二本、去りたる) 御魂、魂返しすやな (二本、魂返しすなや)。

ここには太陽神豊日雲 (天照大神) の御魂上り (死) とその再生を願って行われる呪術の様子が描かれており、古からの太陽崇拜が宮中祭祀の中に取り込まれた姿を見ることが出来る。

この文句の頭に繰り返し唱えられる「アチメ」なるものの正体についてはアメノウズメのウズメに由来するという説や、宇佐八幡系の阿曇であるとする説、朝鮮語との関連を想定する説などがあ

祭祀答問録(三)

多田雄三

『ミソギが活物であれば祭祀も活物でありませう。若し然なりとすれば、活物なる所以、及、活動の状態。』

此の「マ」と彼の「マ」とが抱合合体して新しき管体を築く。それだから、祓禊と呼ぶも、祭祀と名づくるも共に等しく活物であり、それが直に活動の状態で、破壊しては建設し、建設しては破壊する。生まれては死に、死にてはまた生まれる。則、徹頭徹尾活動で、分秒の間と雖も止むことは無い。此の活動は、生死を超越して無始無終に無際限に活潑潑地に生死流転を展開して居る。然して、その到り着いたところは、大平等海なる「タカマノハラ」である。

問 祭祀の教は単なる倫理や道德ではないと思はれます。そこには救済があり、久遠の生命があるものと考へます。

答 人の道は斯くあるべしと標識を立てたのが倫理であり道德であるとすれば、それを超えて、つまり、時間と空間との限界を超越して、無始無終に無際限に流行流転する神律に随順して行はれるのが「マヅリ」である。故に、その行事は必や、久遠の生命に由るのであり、その結果は必や、彼岸に到達するのである。彼岸とは「タカマノハラ」で、それを圖に示せば○である。此の○は太平洋海だから固より久遠である。生死を超えたる「イノチ」である。之レを「アマノミナカヌシノオホミカミ」と称へまつる。

問 「原始反終」の語は祭祀を教へものでありませうか。

答 之れは易經の語。

始を原ね原ねて止まざれば、忽ちとして蹊裡脚下に在り。出でては入り往きては返る。天津金木の太麻邇たる○象を悟證すべきである。經も無く緯も無く、始もなく終もなき妙境である。「アチメ」と呼び、「アマノミナカヌシノオホミカミ」と称へまつる。

フルコトフミ フ
古事記日本書紀等に傳へたる此の神言と詩篇の言とを總合し翻譯すれば次の如くなるべし。

日神の神功成て眺望たれば。海も海にはあらず山とても山にてはなし。我れに仇するものは自斃れ。我れ

を虐げんと謀れるものは己が放てる矢にて胸をば射貫かれたり。見よ。ワギミの神 事の何如に威烈しき
かを。

語を換へて云へば。

日月昭昭不^{トシテ}容^レ邪曲^一。

天地默默萬類蕃息^ス。

月明なる夜ではあるが、北方の山のあたりを眺むれば、紺青の色濃き中に、燦燦と星は光つて居る。ところが、不思議。我が顯魂鎮まるままに、我が幸魂躍るがままに、我が奇魂雄走るままに、我が眞魂の締り締りて、我が和魂澄み清みたれば、星も無く、月も無く、山も、水も、將、大空さへも、唯一圓の光と化りて、それがそのまま、森森羅羅、萬象萬物、出入往返。八百萬神は、歡喜勇躍。過去も、將來も、現在も、上も、下も、四維八隅も、一切合切が、皆唯、一點より出で、一點に歸り、一點に繋がる。功罪賞罰、隱るるに處無く、遁るるに途無し。奇なる哉。妙なる哉。此是死^シ矣。又是矢^ヤ矣。

古老は、之を讚嘆して、「阿知米」と稱へたのである。

昭和十九年四月十二日 東京都鷺宮祓禊所^{ミツギ}に在りて 多田雄三 山谷淨書

以上 第四章 終

死生觀の解説は、之で盡きて居る。けれども、本文は、なほ三分の二も有る。今、それを、第五章として、此

宇氣比

多田山公秘稿

山外一塊土又是一圓光裡過客。

神の宇氣比に依るが故に、人間の身も神の完きが如く完全ならんと志し善惡邪正是非曲直を判別し得るに到るなり。

宇氣比の宇は極小の音、氣は産出にして箇體、比は日にして魂にして氷にして○にして◇にして田にして箇なれば、宇氣比とは極大極小の靈が結び成したる最大最小の神界樂土にして、又、其の主神にして司神にして狭霧にして伊吹にして三女神にして五男神にして天安河にして建速須佐之男にして月夜見月弓月讀命にして天照大御神にして御倉舉板神にして稻倉魂にして怪奇異靈の存在なり、大氣津比賣にして保食神にして豐受比賣にして、女にして芽にして目にして凹にして沃土樂地にして、

陰にして陽にして陰陽不測にして神なるなり、四象にして両儀にして太極にして無極にして極無極にして極大極小にして日止なる四象にして日月にして易なり。

和身魂にして幸身魂にして奇身魂にして咲身魂にして術魂にして、塩土翁なる九魂にして、大日本天皇たる荒身魂にして、眞身魂にして、生玉にして足玉にして玉積魂にして神魂にして高魂にして、底度久御魂にして津夫多都御魂にして阿波佐久御魂にして、大國魂にして、生嶋にして足嶋にして、大日本豊秋津根別にして、大八洲國にして八神殿にして、八尋殿にして、天御柱にして國御柱にして、神世七代にして五代にして八代にして、八百萬魂にしてミタマなるなり。

御魂にして魂にして身魂にして箇體なる宇宙にして、日にして日神にして、月にして月讀命にして、黄泉幽界にして、明闇にして零にして、十なる十字架にして、白玉身にして緋色（ひ

かり）にして、天津神にして、國津神にして、天神地祇にして綿津見にして山祇にして、國常立にして天常立にして、國常立尊なる可美葦牙彦舅にてましますなり。

阿知米にして阿阿比賀天咩爾咩由宇阿伊固宇にてましますなり。

一二三四五六七八九十にして一二三四五六七八九十百千萬にてまします三十二人供人にして五供緒にして十種神寶にして三種神器にして三重子にして三貴子にして比咩にして比古にして神魔にして凹凸にして、如是にして如如にして如来にして、死生觀にして、生死遷流にして、不生滅にして、生不生にして滅不滅にして如如去来なりとは云へるなり。

之れをヒフミなりと云ふなり。

ヒフミヨイムナヤココノタリヤモモチミテリなりとは云へるなり。

以上

昭和十一年十一月十一日夜半

さて、「宇氣比」というのは、少々神話的な表現を借りて、説明するならば、「二柱の日神^{ヒノカミ}が相契り^{あひさむ}て新たな日神^{ヒノカミ}を産み成す神業^{カミツサ}」のことである。その処^{ところ}は「サギリの中」であり、その「サギリ」は「氣吹^{イブキ}の結果」として生じた「零^ヒ」そのものである。

即ち、「イブキ」とは「日神^{ヒノカミ}の物実^{ものざね}を砕いて元の零^ヒに戻す作業」であり、「ウケヒ」の前段階である。そして、その上で、「その零^ヒを組み直して新たな日神^{ヒノカミ}を産み成す作業」が「ウケヒ」なのだ。
物実^{ものざね}とは、その神と同じ「本質」を宿した箇体であり、それ故、新たに生まれた神もまたその同じ「本質」を受け継いでいるが、一旦砕かれてからまた組み直された実体であるため、その「作用^{はたらき}」は祖たる神とは異なっている。異なっているが、こそ、「新たな」日神^{ヒノカミ}である、と言えるのだ。

また、「無宇宙全体」という規模で考えれば、「零^ヒ」は即ち「〇神^{ヒノカミ}」である。よって、「ウケヒ」の説明としては「〇神^{ヒノカミ}が新たな日神^{ヒノカミ}を結び成すこと」と表現することもまた可能だろう。人の身ながらその境地を知り、そうした能力の一部を分与されることを以て「神の宇氣毘^{ウケビ}を得る」と称する。

「イブキ」と「ウケヒ」

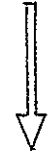
(宇気比の前段階)

(広義では前段階をも含む)

日^{ヒノ}
神^{カミ}

イブキ
気吹

ウケヒ
宇気比



ヒノカミ ものごね
日神の物実
(その神と同じ
本質を宿す。)

分解
スリ
(修理)
(イザナミ)

ヒ
(零)
さざり
狭霧

再構築
カタメナス
(固成)
(イザナギ)

ヒノカミ
新たな日神
(本質は同じで
作用は異なる。)

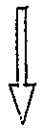
対
応

相
似

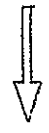
人
間
身

人間身としての

イブキ
気吹行事



神(同土)の「ウケヒ
宇気比」に依りて
神(から)の「ウケヒ
宇気比」を得る。



現身
(イザナミ)

ハラヘ
(イザナミ)

白玉身
(鏡の船)

ミソギ
(イザナギ)

ナホヒ ヒト
直日の人
(神の人)

上段の用語は(幸)14頁ほかより。

下段の用語は「日本民族の信仰」(一)より。



コト
アマ
ツカミ
の
領域

宇（極大極小の零）

ミタマ
御霊に対応

（「本質」を損なわない形で
「そのままに」組み直す）

アマ
ツカミ
の
領域

ウケヒ
宇気比（最大最小の神界）

ミタマ
御魂に対応
（直日）

カミナガラ（→神、治らすなり）
（上に同じ）

無宇宙

ク
ニツカミ
の
領域

ウケヒ
宇気毘（これによって常人も
直日の人となる）

ミタマ
身魂に対応

宇宙

そのための具体的行為を指して
「宇気踏ミタレバ」と言う

→「ヒフミヨイムナヤココノタリヤモモチチミテリ」
このように物事が完成されてゆく。
さまを賛美して二十一秘言をのる

ヒトツを神名として
表現するには

天界地底

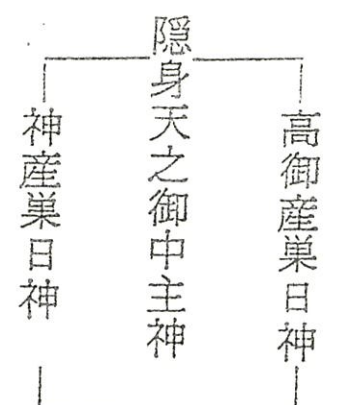
ワガサキリヨリ
チチハハ
ミオヤミオ
ワレニユカリアルオベテ
ヒトビトヤ
ミナトモニサトリサトル
サトル
マホクヒトツ

天界も地底も、実はヒトツであり、レハ
そのヒトツを称するには、左記のとおりと

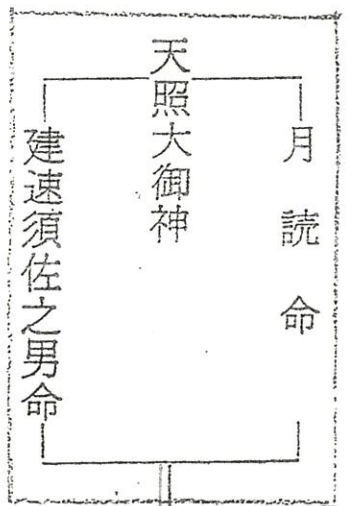
なる

アマテラスオホミカミ
ツキヨミノミコトタタヘマツルナリ
タケハヤスサノヲノミコトニチマシマス
オホヤマトスメラギミエオマシマス
カミコソハタタヘマツルナレ

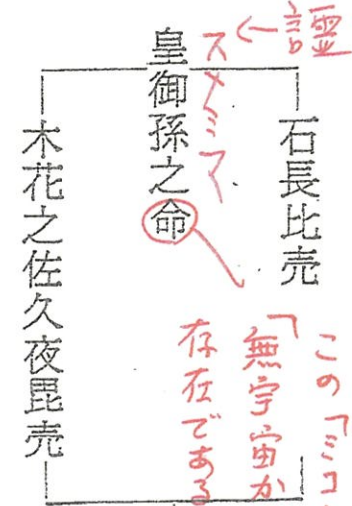
はてしと神の零



はてしと神の魂

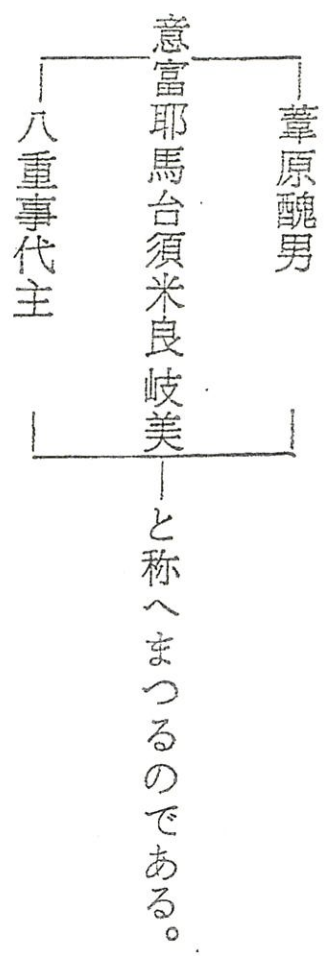


はてしと神の身



この「ミコト」は、無宇宙から降りて来た存在であることと表現と称

まつるが如く経に次序を逐ふて其の御名を異にされるが与に一貫したる「カミ」にてまします。更に人類世界



「十指両掌」で言う「ヒ」零の神としての御生誕
即ち、スナミマノミコトもまた、本来は無宇宙の「ヒ」で
あり、それが「ヒ」のままに結ばれて降りて来たのである。
「最初から身の神として在った」のではない。

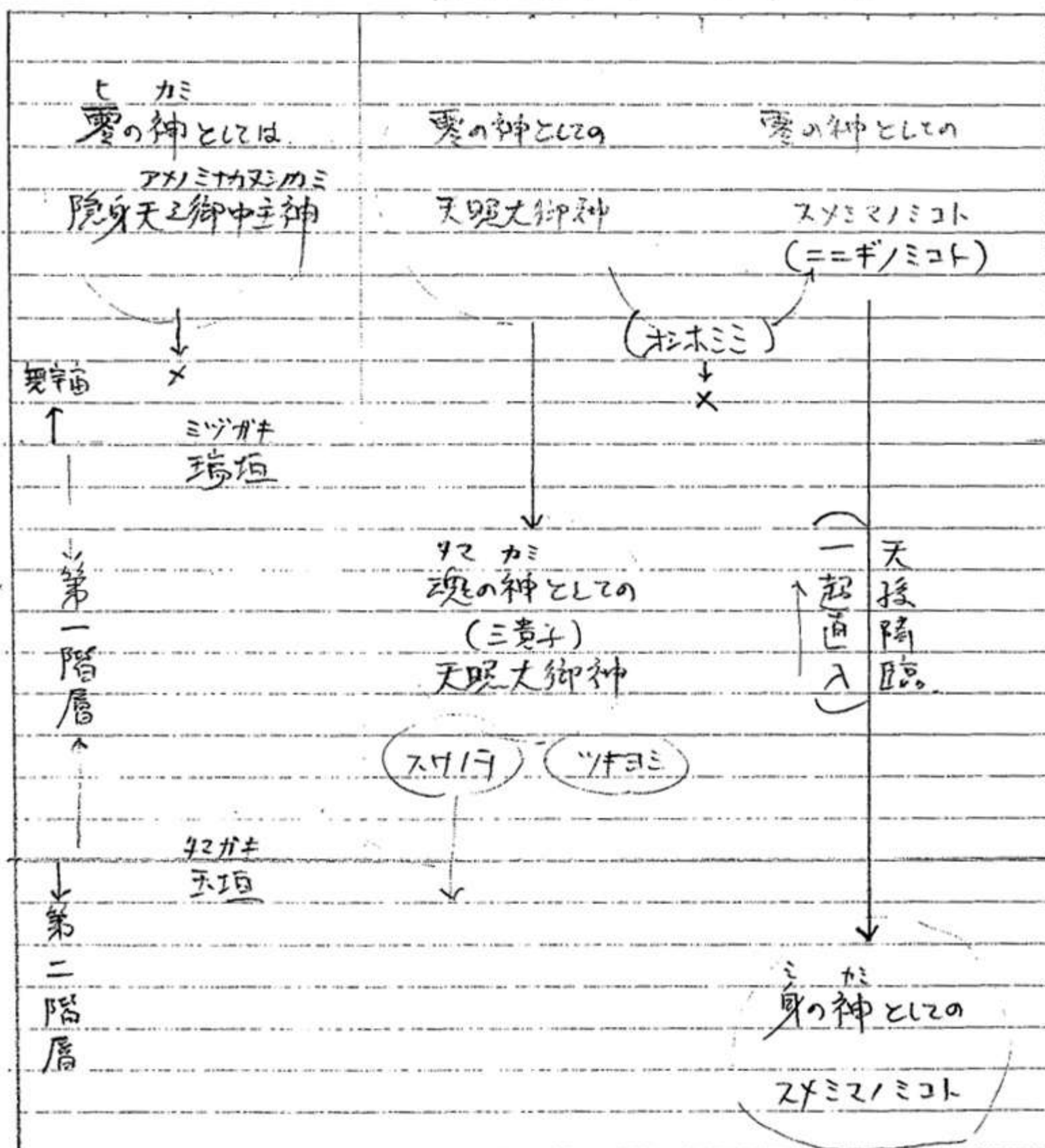
ところがその国は本来神魔包括の①の神であるから時あつては神とも成り魔とも変わるので人間の波瀾が其処に
起る。皇御孫之命は天降りまして人間世界を統治統率し給ふ為に人間身として君臨せさせ給ふので人は茲に五官
に拝みまつることの出来る「神」即「中心」を仰ぎ得たのである。

阿那畏。

日本語にては此の「神」を「オホヤマトスメラギミ」と称へまつりて「葦原醜男」「八重事代主」の妙用を御
用はしますことと拝承します。

人間世界の波瀾曲折は隱身天之御中主神が神魔の軀にてまします為の活用変化なのである。之を数として見れ

一貫したるカミ (表250)



以上をまとめて、受け止める人間が、オホヤマトスラギミである。

チチハハミオヤミオヤのノリトの説明

固の支那文字を見よ。

□古にして□□十にして⊕にして凝固の形象なり。

而して結實なり、結晶なり。産靈にして産魂にして魂にして、結び止めたるなり。

十なる□の蒐集したる□なる固なると共に、□に宿りたる古にして、根本魂と外郭身との團結體を指事したるなり。

之れを見なり子なり孩なりとなす。

兒は儿なる人の宿るところにして宮なり。

子はかがまりたる人なり。他に依據するものなり。

孩は子女の未自立し得ざるものにして、唯其の核在るのみなり。

りとの義なり。

常陸國に小田と北條との二村有り。

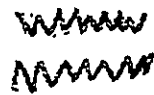
鎌倉時代より今に至るまで相聞ぎ相争ふて止まず。

北條の水を小田に分たず。

小田、之れが爲に耕耘にたへず。

仇敵境界を接するを亥と云ふ

孩の図



之れをハハと云ふ。

母胎に住み母血を吸ひ母乳を呑み、母を食料として生活せるもの即、孩なり。

而して母は之れを喜び、之れを愛撫し、之れを養育す。

これをマンコと云ふ。

七の妙用なり。

カミヨは七にして五にして八にして百にして千にして萬にして一二三四五六七八九十百千萬にして零なり。

之れをチチハハと呼び、ミオヤとも、オヤとも称へまつりてアメツチノカミワなる資料なり財貨なり。

あちめあちめあちめあちめあちめ。

ああひがてんじんゆうあいこ。

ちちははみおやみおやみなとものにさとりさとる。さとりさとればあまねくひとつなり。

あすばかすやぞ。さからかすやぞ。

おおおおおおおお。ああひがてんじんゆうあいこ。

ヒ
零(一)に内在する原理として、一二三があるように、

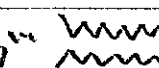
空零(六)に内在する性質として六七八がある。と考えて良い。

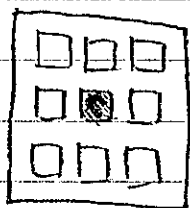
○ヒが二重相としては①であるが故に、

それは①となり、「ヒ零の自己組織化」が可能となる。

同様に、空零もまた状況次第では陰陽不測のメとなる。

母としてのメと子としてのメの離合集散によって、また

筒住が成立する。これが  と描く「七の妙用」である。
(九)



(九→十)

(九は中心(一)と外部(八)

これを一つにまとめて十とする。

この「境地」を全体として
「アマノミナカヌシオホミカミ」

零の神の系譜 (一部)

と云う。

造化參神の
カウリミ同土

タカミムスヒ
ノカミ

アメノミナカヌシ
ノカミ

カミムスヒ
ノカミ

カウリミ↑

↓ウツシオミ

月夜見・月弓・月読命

(零の神としての)
同じ造化參神の
ウツシオミ同土

タカギノカミ ↓ ヨロヅハタトヨ

アキヅシヒメノミコト

そのまた
分靈同土

アメノホアカリノミコト

ホノニギノミコト

マサカアカツカハヤヒ

アメノオシホミミノミコト

アマテラスオホミカミ

ウケヒ

御統珠
ミスマルノタマ

サギリ ↓ 五男神

(物実)
モノザネ

(零)
ヒ

(新たな日神)
ヒノカミ

十拳剣
トツカノツルギ

サギリ ↓ 三女神

宗像大社

五男神
ツツミノミコト

アメノミナカヌシノカミの「
ア」は八平手の義にて開闢、「
メ」は女・陰・凹・坤・卑・
・二・平野沃土、「ノ」とは野
で産出の胎、「ミ」は身・實・
稔・充塞、「ナ」は菜・魚・肴
で資料、「カ」は晃耀赫灼、「
ヌ」は温・盜の「ヌ」と同義、
「シ」とは否で否定で、他の存
在を認めざるもので、「ノ」は
沃地浄土・火國・皇土・四十日
・曠野、「カ」は正誠正義、「
ミ」は邪惡醜陋なるものにて泥
土の義にして、十一全音の義は
生死遷流にして、人身の来ると
ころと、往くところと、来往し
つつ、来往無きところとを教へ
られたるなり。

「境地」

あきさめはけふはなふりそわ
がせこがみのりだからんつかの
はれまぞ。

とは、種子を完全に養ひ育つ
るに神徳を仰がざるべからずと
の神言霊なり。

アメノミナカヌシノカミの神
言霊にして、其の神徳なれば、
火神事にして、高皇産霊神の別
名にして高木神の神挂なり。

あちめあちめ。

ああひがてんじんゆうあいこ

う。

以上

134

昭和十一年十月二十日

前頁下段の解説

「種子」は、人間で言えば根本魂^{ナホヒ}直^{ナホヒ}曰^{ナホヒ}のこと。

これを完全に養ひ育てるには、アメノミナカヌシノカミの神徳を仰ぐことが必要不可欠である。

その事実を表現したのが、「あきさめは〜」の神言霊である。

また「アメノミナカヌシノカミの神徳」とは、ここでは具体的に「高木神」と表現される諸力のことである。

ヒノカミ ヒノカミ
○神と日神の区別

○ 「^ヒ零」-----「サギリ」-----^{タカマノハラ}高天原（無宇宙）

◎ 「ヒカリ」-----「カミ」-----^{ヒノカミ}日神

「言霊の幸」 149～150 参照

150 頁 5 行目より

『サギリの中に生まれる神が^{ヒノカミ}日神である』

古事記では アメノミナカヌシノカミ（造化参神）

日本書紀では クニトコタチノミコト

旧事紀では ~~ア~~メノユヅルヒノアマノサギリ

クニユヅルヒノクニノサギリノミコト

→各々 神名は異なるがすべて「同一の实在」である。

古事記底本 77 頁、「天の安の河の誓約」の段より

『吹き棄^うつる気吹^{いぶき}の狭霧^{さぎり}によって成れる神を^{ヒノカミ}日神と云う』

（幸 149 頁）

幸 151 頁 8 行目

（アメノミナカヌシノオホミカミ
アマテラススメオホミカミ

↑

『そうした気吹の狭霧を吹き成す神は^{ヒノカミ}○神と云い、吹き成された側
である^{ヒノカミ}日神とは区別される』

→（アメノミナカヌシノカミ
アマテラスオホミカミ

觀門の見方

ミイツ
サキリ
→

空なる實在（神の後威の二とて、極極無極、極大極小と表現）
裏↓無宇宙

表↓圓體

表の表↓大宇宙

裏の裏↓點

裏の表↓零

表の裏↓直日

表と裏と合わせると↓ニ↓經↓◎↓◎↓三↓身↓一↓○↓

火經身↓日止↓完全圓成の宇宙である圓體である

此のやうな國を高天原となへて日止と呼ぶのは、完全圓成の宇宙である箇體であるとの義である。

ですから日止（ひと）と呼ぶ人は國家統治の全權であり完全圓滿なる上下である。

言ひ換へると 日本天皇を日止にして 日本天皇國を日止にして高天原にして有道と云ふのである。

ひとみなは なをことにしてわれありと かたみにぞしるかみのうけひて。

マウシガイフノニハ クラシニコマラスヒトデナケレバ
孟子曰。無恒産。而有恒心者

タダシキコトヲスルモノデナイノガ オホクノヒトノ ツネデ
。惟士爲能。若民則無恒産。因

アル ソレダカラ ソレヲノヒトヒトガ アンラクニクラセル
無恒心。苟無恒心。放辟邪侈。

ヤウニシテヤルノガ マツリゴトノ ダイイデアル。

無不爲已。及陷於罪。然後從而
刑之。是罔民也。

デタカラトデ ソレヲツカマヘテ セムルノハ マルデ アミ
ヲハツテ ヒトヲトラヘ ヒトヲコロスヤウナモノデアルト

マコトニソノホリデアル。

マツリゴトとは國家の中心から外郭に向つて油を供給することである。

其の供給された油を運用して外郭から中心に還して行くのが祭である。

それで、マツリゴトとマツリとは内と外と、上と下と、本と末と、枝葉と根幹とが相互に交流疎通する行事なので、相互に表裏をなしつつ國家を治め、天下を和ぐる妙用を現するのである。

油とは比喩である。

猶太人が膏注ぎたるものと云へる如く、油とは神の稜威である。

それ故に又、水とも云ひ、火とも云ひ、靈とも呼び、無とも称するので、極で、無極で、極大で、極小で、物で、純男で、罔象女で、佛で、恵保婆で、閻魔天で、必竟、空なる實在である。

其の實在は裏から觀れば無宇

宙で、表から觀れば箇體で、表の表から觀れば大宇宙で、裏の裏から觀れば點で、裏の表から觀れば零で、表の裏から觀れば直日で、表と裏とを合せて觀れば二で、経で、○で、○で、三で、身で、一で、○で、火経身で、日止で、人で、人間世界にほかならぬのである。

火人（ひと）と日止（ひと）と人間世界との關係を簡単に説明すれば如上である。

そのそのの ところころにそのさまの うつるをみればかみながらなる。

以上 昭和十四年五月十五日

山谷 識

玉の緒を結び結ひて人の身はい着くなるなる天安川。

結び置きし門の若柳茂り合ひ枝わかすこそ色増さりけれ。

之れを春日比咩の示徳となすので結び結びて統一魂と人の仰ぐなる身魂城である。

之れを身魂齋功成りたる曉となすので喪であり葬であり墓であつて奥津城であるから茲にはじめて美耶志呂を築き得たので神宮を建立して得たので神社であつて社で杜で茂利で守で見守の宮で鎮魂神の曉で大嘗身魂齋で完全に示界を築き成した身魂である。

佛法に過去七佛と傳へられたのは七重四匝の佛國を築き成した身魂城なので法身佛で應身佛で報身佛で一字金輪大日如來であるから釋迦大日で事理無礙無量壽如來である。

此の築城は神直靈の神業で命と尊との宇氣比であるから断じて過つことはない。

けれども成住壞滅と人の眺むる現象

世界と異なることなく神業の功成りたる曉はまた直に凋落に向ひつつあるの現身在人間世界を去ると同時に破壊を始めざるを得ざるは宇宙成壞の運命である。住ることとは無いの

で其の人を得なければ急轉直下 エスの神國の如くであり或は悉達多太子の佛國が子弟の為に暫く住るに似たるが如くでもあるのである。

今茲來て我復遊ぶ渡津見の鱗の宮は神の常宮。

生死病死は單現象世界のみではない。否。人間の身は知り得ずとも生死遷流の宇宙現象は刹那生滅して大宇大宙と交替流通しつつ迷悟地を替へ眞妄境を隔てても究極必竟一圓光明一音響裡の神魔天地に外ならぬので悟れば佛迷へば衆生だと佛徒の云ふのは事實である眞理である。

杜るかぎりなきたるけさの日神業天地共に統一魂天地共に統一魂天地共に統一魂天地共に統一魂

天地と判れては偶ひ日月とは運行りて人の世を神代とは成せ人皆を神とこそ為め神髓神のまにまにに神しらすまに。

刹那生滅神魔出没今生後生如來去來。如是神人築城秘業調伏濟度救出誘導攝入示界神隨隨時隨處隨身矣焉哉。

八種神神社加加禮神能固止神能遮邇邇邇神知良須邇邇。

觀世音菩薩佛界新生の菩薩を導き來

る相は幼兒の如く膚は水精に異らずと古老の傳へ記したのは神挂の證左で饒速日尊としての奇身魂なのである。

人間身としての奇身魂は黄色で直日としては黄光で直靈は白玉の如く水精宮の如くである。印度に摩尼と稱へ支那人が寶珠と翻譯したところの璽なので太玉なので十種神寶で三貴子で三重の子と古歌の傳ふところでも三重相で天照坐 皇大御神天照皇大御神天照大御神にてましますから三種神器で止袁加美惠美多米で猶太民族が十字架と崇敬し支那民族が皇帝と尊信し天帝と奉拝する神籬磐境なので神國統治の曉である。

布留の宮安の河原に人ぞ寄る世を朝夕の隔有らなく。

山裡山外日月清明一點昭昭不容邪曲。秋雨は今日はな降りそ我がせこが稔田刈らん束の霽間ぞ。

大小長短廣狹深淺は人間の尺度である。人間世界を計量することはできる。

けれども極大極小の火極無極の日最大最小の無限の靈無始終の否無終終無始始の魂絶相對の非原始反終の緋非否の水を計算することはできるとでない。

零の説明に使える金、一

然るに世上哲學者と稱して大宇宙に球形である中心の力は同一であるから同一距離に達するのであると説いて居る。

然らば其の球の外は如何にと問へば大宇宙とはあらん限りであるから其の外と云ふことはない。大宇宙の外といふことは無いので想像することができぬ。唯大宇宙の球形であることを知るのみである大宇宙の球形である如く小宇宙もまた球形である一切は球の結成である。冥想裡に容易に知ることができする事理であると答へて自己が大宇宙なるかの如く冥想が一切なるかの如く空嘯いて之れが日本民族の宇宙観だと傲語して居る。

けれども日本民族の古典には宇宙を比と教へ大宇宙を比と傳へ小宇宙を比と云へるのみで球が圓か方か稜か線か面か點かを云云しては居らぬ。

此の哲學者は誤れる言靈學を弄して古典を曲解し謬見に墮ちたもので人間身と示界との異別を無視し一切を人間の尺度で計らうと思ひ量り得ると考へ算へ得たと思ひ誤ったものである。

大宇宙は宏大である高莊である幽遠である微妙である。一有一類一世界を見て漫然と類推し得るところではない。

曉の海原遠く見渡せば天地は今や統一する存在の盡盡。
アカツキノウナハラトホクミワタセバアメツチヘアリ
暁の海原遠く見渡せば天地は存在の盡盡統一にたる。

晃耀赫灼宇宙美趣朝陽赫赫天體美觀
鳥歌泉聲天地景致翻翻胡蝶輕羅舞。

流水は心有りて鳥の歌を喜び櫻花は笑ひて雲の行くを止むるもので之れを日本の古典は瓊和止茂茂由良と教へて宇宙化育の祕神業である。

朝もよし城上の宮は神髓神の宇気
比てかみかかります。

天照皇大御神の御田三處有り素盞

雄の御田亦三處有りと日本書紀の傳へたる美田沃地で高天原である。御田とは借字で神言靈で晃耀赫灼たる天國樂園である西方淨土である修理固成たる天皇國である聖であるとの義で伊邪那美神の火神業の功成りたる暁で天沼矛の神傳である。

塞坐黄泉戸神で道反神で大禍津日神であるところの伊邪那美神の神業は地界魔境を調伏し濟度し救出するので極大極小の火で陰で陽で男で女で陰陽男女で非否で是不是で破壊で建設で死生で死生觀であるから解脱である大悟徹底である。聖無動經に出大智火以焚

焼一切魔軍而成大火聚徒非燒諸冥衆而耳

自濟度し然らざる人人は神人を待ち或は中有に彷徨してそのまま轉生輪廻し亦是天祖の調伏濟度救出誘導攝入に浴するので千態萬様に轉化變生するのである。之れを湯津津魔具志と教へて轉變出沒の義である現象世界の實際で生死遷流の事理である。

天祖の加美能加美輪散で生魂足魂玉留魂の産靈で人類萬類は此の神徳の中に杜りて其の神徳を現し得たりと思ふのである。

けれども一切は唯宇宙の外なる加美の力のみであるといふようなものでは固よりない。殊に中古以來の人人が加

美の語義を忘れ美固止の何たるかを知らず。そのうへ神を讀ふるに様の如き人間的敬語を加へ更に御の語を重ぬるが如きは全く音義を忘れて言語の墮落した為で最悲むべく深く誠むべきことである。

人間身雜糅で神魔紛争するもので風雨時ならざる現象である。

然も此の中に杜りて念念勿生疑で唯
一筋に観世音の御名を称へまつる人が
有るならば具一切功德慈眼視衆生。皆
共に解脱。^{サトリサトル}之れが観音佛智の力である
とは梵音たる加美能言靈^{カミノコトダマ}の威嚴妙用は
人間身心の測り知るべからざるところ
であるとの義である。

はるひひめはるひひめはるひひ
め。ああひがてんじんゆうあいこ
う。

あまてらしましますすめおほみか
みあまてらすすめおほみかみあま
てらすおほみかみ。

あまてらしましますすめおほみか
みあまてらすすめおほみかみあま
てらすおほみかみ。

あまてらしましますすめおほみか
みあまてらすすめおほみかみあま
てらすおほみかみ。

あまてらしましますすめおほみか
みあまてらすすめおほみかみあま
てらすおほみかみ。

あまてらしましますすめおほみか
みあまてらすすめおほみかみあま
てらすおほみかみ。

あまてらしましますすめおほみか
みあまてらすすめおほみかみあま
てらすおほみかみ。

つ。日少宮・日隅宮・の古伝また甚多し。

這は教にあらず。然りと雖

教は這にあらざるにあらず。

第六節 完

第七節

「零が結び結んで」とか、「火が燃えに燃えて」とか、「日が照りに照つて」とか、又は、「一が積り積つて」と色色に説明は別でも、結局、それは、「稜威の魂」の「産靈産魂」であり、その完成された暁を、「日少宮」讀へ、神数觀の上では、第三十六神界と称して、天津神の神座である。カミクラ

それを、日本古典は、伊邪那岐命が、伊邪那美命に、事戸を渡し、阿波岐原に禊された結果として伝へられたのである。之は、神代の神の御上であるが、人間身として見れば、此の身を清く明くして、此の身此のままに、の身と成り得たのである。此の身此のままの神の身を築き成せば、それは則、天皇国の大御宝たる実を顕し得るので、人としての仕事は、此処に完成されたのである。

「天皇の稜威の中の我である事実を完全に顕現する」。

それは、平生無事の時には、氣も付かぬ人が多いのであるが、非常時局に際会すると、外からの刺戟と、内かの覚醒とで、「大君の稜威の身」であることを悟つて、全身心を捧げまつる勇者と成るのである。

マストラヲノ、トルヤ。タマホコ。タママキテ。コヲロコヲロニ。ヒトムスブナレ。

よしや今。神の恵みの、厚からぬこともやあると、迷ふとも。また来る日をば、心して。いざ励まなむ。

人の世の道。

励み、励まし、相率いて、相互に、「大君の稜威の身」として、神国淨地を築く、

そのやうにして、その国の成り成る時、その人の生り出でし時、それを讃へて、「加牟^{カム}」と呼ぶ。それは、日の三田の賜物であり、三不可分の一である。三柱御祖神の神挂りであるとの意である。さうして、その神界が成した時、それを、数としては、「三十六」だと云ふ。それは、累積し尽した大数だからなので、「一二三四五六七八九十」としての満数が、「ヒト」で、日止とも、火人^{ヒト}とも、また、人^{ヒト}とも書かれるのに対し、三不可分のたる三重の一、即、「ミイズ」を単位としての十は、神数としての三十六なのである、と云ふと、三の十倍なれば三十であらうと反問されるかと思ふ。

三の十倍は慥に三十で、此の三十なる「カミ」は、古典が、別天神とも、无方とも、陰陽不則とも伝へたとする。之を、人間的の位置からは、仮に、三十神界と称するのである。之は、古典に所云「天地初発」で、「神は未完成」である。それを、古典は、「水に浮べる脂の如くである」と記された。此の三十神界を制御し主宰する二柱御祖神のましまして、はじめて、宇宙は完成するのである。それで、古典は、「天地初発之時、於高天原成神名、天之御中主神。次高御産巢日神。次神産巢日神。此三柱神者、並独神成坐而、隱身也。」「次国稚如浮脂而、久羅下那洲多陀用幣琉之時、如葦牙因萌騰之物而、成神名、宇麻志阿斯訶備比古遲神。次天之常立神。此一柱神亦独神成坐而、隱身也。」とて、宇宙構成の次序を教へられたのである。

その初は、天之御中主神・高御産巢日神・神産巢日神と仰ぐ三柱^{カミ}の十である。之を、別の詞では、生産靈・足

産靈・玉留産靈・と称へ稜威三柱神と仰ぎ、未、御身を顕はし給はぬのである。

「御身を顕はし給はぬ」とは、「極大極小の零界」との義で、大平等海である。それ故に、それを、「水に浮べる脂の如くである」と譬へたのである。それが、「許袁呂許袁呂邇画鳴され」結び結ぶ様を形容すれば、葦牙の萌え出づるにも似て居る。之は、「神魂カミムスビであり、高魂タカミムスビである」。此の二柱の十カミが、宇宙主宰の神として、神界を完成するのである。がそれは、未、隠身にましますから等しく零の神である。零は零でも、此の位置に於ける零は、稜威三柱タマノミハシラノカミの陰陽の祖神である。それ故、数としては、三の二倍で、六で、六としての零である。☉と画き、又、☼とも画す。無にして有にして、非神非魔。それで、宇宙を完成するものは、「六の又六」であり、三十と六との和でもある。仍て。此の神界を、第三十六神界とも、三十六シとも称へまつる。則、火中水裡一点昭昭の☐で、春日比咩ハルヒヒメの神と仰ぎまつる。亦名 日神で、三貴子にてまします。

古典は、日神御生誕の秘を幾通りか伝へてあるが、世人の読み慣れ聞き慣れて居るのは、阿波岐原の禊と、天窟開闢記とであらう。異域他邦の仏誕生記。旧約創世紀、基督生誕伝、等に就いては、また別に、解説の日があるであらう。

さて、その、第三十六神界の主神は、二柱御神とも、三貴子とも、造化三神とも、数多の御称号が太古以来伝えられてある。が、兎に角、三十六で完成した神界は、また、三十七から一つ一つと数を増す毎に破壊されて行く。

行く水の、行くがまにまに、行き行きて。行きのはてなく、行きなづみたる。

之を、第三十七神界主神の秘言を称へ、無限ならざる有限で、零ならざるの一で。終りの始めで、一音に称

へては、「シ」である。それは三十六で結ばれた神界が、破壊されながらも、やがてまた結び来たるべき種子なのである。此の種子が有るので、人天万類は、生死関頭を縦走横馳しつつも、安心立命し得るのである。

日本天皇の古典は、之を「穂」^{イナボ}の伝として教へ来られた。その「イナボ」は、いとも醜く穢き物を摂り集めて、そこに、天津日の御光を仰ぎまつれば、不思議にも、その醜惡汚穢のものが変じて、善を尽し美を極めたる資材として、人の身を養ひ、神の心を和らげ、万有の命と成るのである。此の事理を、天照大御神には、天孫降臨の勅としてお授けになられた。それを、日本書紀には、「天照大神勅曰。以吾高天原所御齋庭之穂。亦当御於吾児。」と記してある。

之を翻譯すると、「此の穂^{イナボ}は、神から人に、親から子に、次ぎ次ぎに際限無く継続して、醜^{アガ}きものを陽く美しく、悪しきものを善く正しく、濁れるものを清く精しく、養ひ育てて、神の代の高天原に、神と成らしむる種子^{ミイノチ}であり、瑞宝^{ミタカラ}である。」となる。

之は、齋庭の秘事で、宇宙成壞の事理を教へ諭されたのである。その齋庭とは、神齋る祭りの庭である。それは、神の御位置から神を齋る神事との義で、それが則、「穂」の行事である。「庭」とあるから単に客観的の場所とのみ思ひ誤るかも知れられぬ。けれどもその「庭」には、庭の主観が有り、また、主客合観が有る。場所として客観しただけでは、物であるが、その物は、何如なる物でも、必、存在すると共に活動して居るので、そこに主観が有る。それは則、心である。物であると共に心である。其の「物であり心である」ものを合せて観れば、中樞で、「神」と呼ばるるのである。此の神が、神ながらに、別れては会ひ、遭ひてはまた別れ、往きては返り、来ては去る。それを「ユニハ」と呼ぶ。その「ユ」は、従^{ミリ}であり、湯である。「天ヨリ地ヨリ。彼ヨリ此ヨリ。

火ヨリ水ヨリ。乾ヨリ湿ヨリ。雌ヨリ雄ヨリ。陰ヨリ陽ヨリ。」等の「ヨリ」で、其の妙用は「湯」で、人としての位置から云へば、「日に新に、日に日に新に、又日に新」なのである。「二」は、煮で、似で、熟で、和で、仁で、二で、相寄り相助けて、神界楽土を完成するの義である。「ハ」とは、葉で分派分出で、子女たる芽である。出でて窮まらず、流れて尽きざるものである。此のやうな「ユニハ」とは、神子産出の胎で、神人長養の資材であり、やがて又是「神」である。之を「ミトシスメカミ」と長みまつるのは、創造建設の神徳を讃美しての御名で、天真名井の「ミモヒ」たる水神にてまします。此の水神を、裏から拝みまつれば、破壊を司る第三十七神界の主である。が、日本の古典には、その教へが無い。文部には、之を「坎」と伝へ、禹の治水と表裏して、破壊と建設との分岐点を明示してある。

破壊の水を「坎」と教へたのは、科アサの義で、包犧氏が☵と描いて、二陰が一陽を姦するもので、人間世界の終末を指示したので、人と禽獸虫魚との區別は、唯此の一線の境に依るものであることを知らしめたのである。

「唯此の一線」「線無きの線」。之を「黄泉比良坂」なりとは、復活の面より教へたる日本古典の神伝である。

此の一線を境として神界成壞の秘事が行はれる。その数理は、固より秘数であるから、細説を憚るが、その数字の一端を並べて置かうならば、先、零。次ぎは一。それから三十六・三十七。四十四・四十九・五十。その次は五十有五で、天地の数だと伝へてある。之は、祖神の教へ給へるに依りて、包犧氏が伝承したのである。

火神

多田山公遺稿

死者を齋ると云ふことは、分裂し分散し行く身魂をして、速に其の極に達せしむるの義であるから、之れを「ヒノカミワザ」とも「ヒノカミワザ」とも「スリカタメナスナルアマノヌホコノカミカカリ」とも「ヒ」とも称するので、物で云へば燃ゆる火で、光る日で、極端なる氷で、究極の靈（ひ）で、根本の魂（ひ）で、解脱の零（ひ）で、最大最小の一で、統治統率の●◇田＋十であるから、極大で、極小で、窮数で、満数で「ヒ」だと教へられたので、其の色を云へば緋で、その相を云へば一圓相（ひかり）で、其の響を云へば一音響で、人の聴き得ざるおとたなばた人知らぬ遮邇で、本打切り未打断ちたる天

津金木で、始終の無き始終で、非で、否で、非否で、靈（び）で、魂（び）で、産靈（むすひ）で、産魂（むすび）で、高皇産靈で、神皇産靈で、生魂で、足魂で、玉留魂で、高魂で、神魂で、生玉で、足玉で、玉留玉で、道反玉で、死反玉である。

「イナボ」と云ふのである。
日本書紀一書曰。

マタミコトノリシタマハク　タカマノハラニシラス
「又勅曰。以吾高天原所御齋

ナル　ユニハノイナボモチテ　マタ　マサニ　スメミマノ
庭之穂。亦當御於吾兒。」

ミコトニ　シラサシメヨ

「齋庭之穂」とは「マツリノ二ハ」の「イナボ」であるから極大極小の零（ひ）を結び結びて宇宙を築き、宇宙を統治すべきなりとの義である。

齋庭（ゆには）とは「ミタママツリ」で「齋」である。

之れを「メノカミワザ」とも「ヒメカミワザ」とも称するので、「イナシコメシコメキ」で醜女で、醜の又醜の醜の極であ

る大醜で、大美女のである。
「亦當御於吾兒」とは、大直日の如く、直日の徳を明にすべしとの義である。

齋庭祕言一圓相。

皇子皇孫一音響。

眼耳鼻舌一空零。

随縁起滅一天命。

ひふみよいむなやここのたり
やももちちみてり。

あちめ　あうを。

う。う。う。う。う。と。う

と。う。

◇

「稻羽素菟」とは、「イナバ」なる正しき資料にして、「シロウサギ」とは「ウサギ」にして極小の結びたる身なりとの義なるなり。

極小の結びたる身なりとは、

「ウト」にして神聖なり。

之れを「カミナガラ」とたた

へて「カム」なり。

「カミノマニ」にして神人なり。

り。

以上

昭和十一年七月十四日夜半

(ヒ) ^{ヒカミ} 日神 (極、極大極小、う)

無宇宙

(ヒカリ) ^{ナヒ} 直日 (日神の神輪) = 神
(最大最小)

(極小の縮みたる身 ウト)

宇宙

^{ナヒ} 直日の (そのままの) ^ヒ 人 = ^{カミ} 神人 (名詞)

→ これは「神律 に正しく ^{ヒカ} 随った人」とも

表現でまゐるので、修飾語としては、

その「神律に随ってそれを ^{ヒカ} する様」と

指して、^{カミ} 神へ、と言う。(未234頁)

(神聖、神人、カミ、はほぼ同義語)

「ヒ」の意味とその表現について

零^ヒ——時空や万物を構成する根本資料としての「實在」そのものを指す名称。○神

日^ヒ——その「實在」が「中心」として機能している際の名称。「統一^ヒ体」全体を指す場合もある。

↓極、唯一点、種子^{タネ}、、光^{ヒカリ}、日神^{ヒノカミ}とも。

火^ヒ——その「實在」が単なる「資料」としてしか機能していない状態の名称。

「中心」に付随してその「外郭」を構成するか、さもなくば遊離して「魔^{マガツレ}」となる。

イナボー「種子」と同義。極大極小の零（ヒ）のことを種子とも言い、「斎庭之穂」（マツリノニハのイナ

ボ）とも表現する。

イナバー正しき資料のこと。

万物は「中心」より出でて「中心」に帰る。その「中心」を「ヒ」と呼ぶが、同時に、その出たり帰ったりする際の「一貫した筋道」をも「ヒ」と称する。

人間にこの「ヒ」を教えるが、フルクマノミコト アマテラスオホミカミ ミハタラキ振魂尊こと天照大御神の御神徳である。